障碍をもつ幼児の保育(7)

―この子と出会ったとき―

津守　真(M)
津守　房江(F)

手を使うこと　その二

手を使い始めたドラマ

F　前回の最後に津守真が「どこまでもその子の感覚を尊重し、それを表現できるようにすることが大切です」と言っていましたが、それをもっと深めたいと考えて手が表現するものを今回話し合うことにしました。

M　私は保育の中で子どもが身体で表現しているものが何かということを見ていきたいと思っています。手が子どもの心の中にあるものを表現していることがしばしばあることを保育の中で気が付いてきました。

F　以前から『表現と理解』ということをよく話していられたと思うのですが。

M　それは私の保育の実践にあたっての非常に重要な視点だったんです。心の表現であると考えたときに、この

行動はそのときのどういう子どもの心を表しているのかということを私はいつも考えていました。あるときひとりの子どもが指を小さく動かして、まあ、こういう指先の動きというのは言葉で説明するのが非常に難しいのだけれども、斜面をすべり降りるかのような、そんな動作を指先で示しているときがありました。で、そのときにF先生（註『保育者の地平』（ミネルヴァ書房）の中にこの時の事は描かれていますが、そこにF先生としたのでその時の名残でここでも話の中でF先生と語られました）がビニールテープをもってきました。その場面を私は忘れることができないんです。F先生はビニールテープを子どもの肩の高さぐらいのところから、スウッとこう伸ばして斜面にして、床にそれを貼り付けました。あなた、そのときのこと話しますか？

F　この子は歩けるけれども自分では歩かずに、自分の大事な宝物を自分が持ったままお母さんに抱かれていて、何から何までお母さんにやってもらっていて、自分の手はほとんど使わない子だったんです。だから、何でこんなに手を使わないの？　どうしてお母さんはそんなにやってあげちゃうの？　ということがとても保育の中で私の心にひっかかっていたんです。そのときその子が前日に斜面を滑り降りる他の子どもを見上げていた姿を覚えていたので、その子が人差し指と中指で歩くような姿をしたとき、「あ、この子も斜面を滑り降りたい気持ちがあるのかな」と思ってビニールテープで斜面を作ってあげた。その手のわずかな動きに対して私が心を動かされて、こんなのを作ったらこの子はどう展開させるだろうかって、そんな気持ちでやったんですね。そしてその子はどうしたんでしたっけ。あなたが注目したほど私は結果を考えていませんでした。

M　私はあのときに、あの子が人差し指と中指を交互に動かして、ビニールテープをじっと見つめていた光景を、今になってもはっきり覚えています。そして指先で斜面を降りる動作をしたんです。その日は、そのビニー

ルテープを、家まで持って帰ったんです。

F　あの子はベタベタするものは嫌いだったんですね。だからもしかしたらビニールテープのベタベタがあの子の拒否反応にあったかもしれないけれど、そうではなくて、私のやったことを受け取って楽しくその日を過ごすことができた。

M　その次の日か、あるいは更に次の次の日かに、もう一つ私が忘れることができないことは、手をこう握ってこぶしのようにして、その指と指の間から親指の先をチョロッとこう出していたことなんです。

F　あの子はかなり来初めからそういう手をしていましたよ。初めはそんなに気にならなかったけれども、「手は使わないでぎゅっと握ってしまっている」と思って手に注目したときに指の間から親指がチョロッと顔を出している。それは自分を隠している臆病な動物がちょっと外をのぞいているような姿にも見えたし、また大地の中から新しい芽が萌え出るときのようにも見えたのです。だから、この子には自分自身というものがいま芽生え始めるようで、この子のこれからに希望を持っていたんです。保育の中でそれがどう展開するかは分からないけれども、色々働きかけていいと思っていました。繊細さもあるけれどあまり遠慮し過ぎないで、周りを整えてあげよう。それをこの子は拒否しないだろうと私は思ったんです。

M　それからしばらく後のことだと思うのだけれど、この子が手を紙の上に乗せてクレヨンで手をなぞっていたことがありました。それはお母さんが「こんなことしたら」なんて言って最初やってたと思うんだけど、それをF先生がはさみで切り抜いたんですね。そうしたらその子はとっても嬉しそうにそれを眺めていた。F先生はそれを更に袖口につけてあげて、そしたら彼はその手が取れると自分で持って、今度はわざと自分で落として、またF先生がつけてあげると喜んで見ていて、またそれが取れるとそれをわざと自分で落としてというように、画

用紙の手を自分で操作して手から離したりまた手に持ったりということを繰り返していた。そのころからその子はご飯も自分の手で食べるようになったり、自分の手を使うことがとっても顕著に出てきたような気がします。

手の表現するものと保育

F　私はそのF先生なわけだけれども、F先生としていうならば、確かにその場面は記憶しているけれども特別なこととしてやったわけじゃないんです。自分の手をお母さんに型どってもらっていた、それを切り抜いたらもっと手らしくなるだろうし、それを上着の袖口につけてあげたらもう一本手ができるじゃないかという、いたずら心というか一歩踏み込んだ気持ちでつけてあげたのです。でもそれは嫌がられる可能性もあるわけだし、そんなことをする私自身が、嫌われる可能性もある。でも私がこの子には、ちょっと一歩踏み込んで大丈夫だなって思えたのは一緒にその場を共有している保育者の直感のようなものかと思います。この子にはなにか生命力があるって私は思ったんですね。

M　私はそれがとっても面白くてね、その子はその紙の手を手に持って、それからかなり長い時間遊びました。手で遊ぶっていうことが、あたかも自分の手を使うっていうことと重なり合ってね、それまでこの子は自分の手を使うことが非常に少なかったからそれでこの切り抜いた手を自分の手で遊ぶっていうのは、とても面白い保育だと思った。

F　そう言われると嬉しいけれども、それより私は、言葉を話さないし、表情も少ない子どもの中からこぼれ出した表現が手だということを、私の意識に上らせて考えることができたのです。手はうそをつかないような気がするの。表情はね、うそがつけるんですよ。悲しくても笑うとか、大人もやることだけれども、手はうそをつかないから、全身で触れている保育者は手が語っていることに敏感になることが大切なのだと気がついたのです。

M　いま手のことに焦点を当てているけれど、開くようになったのは手だけのことじゃなくて全身のことだということでした。そのころこの子は手というよりは全身でホールの中を走りまわりました。音楽に合わせて実習生や他の先生も一緒に走りまわることがとても楽しくなっていました。私も一緒にピアノを弾いたりしましたが、この子は本当に楽しそうに口をあけて笑って、体中が開いていったような気がします。で、その中の一つがこの手に、象徴的に表されているのではないでしょうか。

小さな動きを見るということで話が進んでいるんだけれども、これは保育全体の中では走りまわったり笑って楽しんだり、そういうことの中で行われていて、保育の中でいつも手とか指先を見逃さないように気を付けて見ることが、次の展開のきっかけになることがあると考えるのです。

F　話しているうちに、手は無意識の言葉を語っているのだって、いま気付かされました。この子のお母さんは幼児期にこの子の代わりとなって尽くしていて、ちょっとやり過ぎかと初めは思うくらいやっていたけれども、そのことがまた次への展開を引き出したんですね。きっとこの子の中にお母さんによって育てられた生命力が花開くときが用意されていたのだと思うのです。

手が空回りする子どもの傍らで……
おとなは空回りを踏みとどまって

F　別のひとりの子どもの話になりますが、お母さんが私に対して、「この子はこんなこともできない、あんなこともできない」って子どものことを言っているそばで、その子は、手をまるでリスみたいに両手をクルクルクルクル「いーとー巻き巻き」みたいに動かすんです。あなたがそれを「手が空回りしている」って言われたけれど

ね、大人の期待に添い得ないときの子どもの手の動きっていうのはそのようになるのでしょうか？

M　いまのその子がね、「いーとー巻き巻き」の遊び歌のように手をクルクル回しているのをお母さんはあんまり喜ばなかったんですね。変なことをするって言って。僕はそれを見ていて、変なこととは考えられなかった。その子の手はなにかをしっかりと握るんでもないし、掴むんでもないし、その手で何かをするのでもなく、何かをしたいんだけれども空回りしているように見えた。それがシャボン玉遊びというところに気持ちが決まったときに、もう手のクルクル回す動きがなくなって、シャボン玉を膨らましてはこわれ、膨らましてはこわれ、こわれては膨らますということをやって、とても面白く遊んだんだと思いますね。お母さんはそのことに気が付かなかったし、子どもにとって大切なこととは思わなかった。お母さんが変なことというふうに考えたときに、その子のまわりでお母さん自身が空回りしているようなそんな印象を受けますね。

F　でもね、そういう気持ちになるのも分かるような気がするのです。お母さんだけじゃなくて保育者だって、あの子はあんなことしている子だって、言いたくなりますよ。

その時、私もシャボン玉を室内でやって、風のない部屋の中のじゅうたんの上に落ちたのがなかなか割れないのを、あの子がじーっと割れるまで見ている、そのながーい時間その子は全く手なんて回すことをしてない。シャボン玉っていうのは息を吸ったり吐いたりするだけで、美しいシャボン玉ができて、そうやって存在することが肯定されたっていうふうに、私に見えました。そこでやっとこの子の手の空回りは終わったんだなって思いました。

M　その子の手の空回りを、変なことをしてるって保育者が見なくなるときに、保育者自身もまた自分が空回りをしているときがあるっていうことに気づくときじゃな

いかと思います。そのことに気づくと子どもの手の動きも変なというふうには見えなくなって、なんて言うんでしょうね……。

F　保育者も親も気になる変な行動を、今日はやらなかった。今日はやったなんていうふうには見ていなくてね、やらないとね。もう忘れてしまうの。

M　ああ、そう、本当。

F　そして振り返ってみてね、「あれ、いつの間にやめたの」というように気が付く。だから何月何日にやめたなんて特定できない。それが親でもあり保育者でもあるんじゃないかしら。

M　つまり保育者も自分が空回りすることがあるけれど、そのことをそんなにはっきり意識には上らせない。保育者は体の中で気が付いても、それは忘れてしまって次に進んでいる。だから私は、いつも子どもも大人も上向きに前進するようなそういう生き方をするっていうことが、保育のとても大事なことなんじゃないかなと思うのですよ。

F　自分が否定されたと感じている子どもの中には、とても変わった複雑な行動をする子もいますが、それについては保育者や親はどうしたらいいのでしょう。

M　複雑なと言われたその最中にもね、保育者は自分の中の子どもや親を否定したくなる心を、ちょっとストップさせて、自分ももう一つ上向きにその子と一緒にその瞬間を過ごそうとする。大変細かな話だけれども、その細かなところに保育者の一番の本領があるのじゃないか。

F　そうですね。保育者は子どものことも親のことも見ている。でも子どものことは誰もが愛しているから、どちらかっていうと、親に対してきつくなるところが難しいところなんです。

M　本当にそれは保育の最中のね、ごく小さなきっかけのところです。この親だから子どもがこうなる、というふうな考えの轍にはまらないで、ちょっと踏みとどまっ

て自分もそのときを、さらっと明るく過ごそうとする。それが保育っていうもんじゃないかしら。

自分の手を砂に埋める……悲痛な表現から遊びへ

F　複雑な表現について、あなたが最前線でやってらっしゃったとき、記憶に残っていることは何ですか。

M　すぐにそれで思い出すのは手を砂の中にうずめた子どものことです。その子は自分で言葉で表現する子どもじゃなかった。ある日、私と一緒に公園に行ったときのことです。木々の間を風が吹いて、小鳥がさえずっていて、とても素敵なとなりの公園なんです。そこで自然の中で自然と一体になってその子はとてもいい時間を一時間ぐらい過ごしました。そのときに、ちょうどどこかの幼稚園帰りのお母さんと子どもが十人ぐらいもその場所に来て、そして色々おしゃべりを始めました。うちの子はこれだけ字が書けるようになったとか、うちの子はこんなことやった、あんなことやったというお母さんたちの自慢話だったんですね。その子はそれをずっと聞いていて、突然さっとそこから駆け出して立ち去りました。そしてこぶしで自分の頭を何回も何回もたたき始めました。それで私はその子に寄り添って、公園の静けさの中で、「あなたは言葉は話さないけれども、とってもいろんなことを考えていて、あなたはとても素敵ですよね」って話しました。

そしたらその子は自分の手を砂のなかに突っ込んでその手に砂をいっぱいかけた。両手をうずめたんです。で、私が一緒にその砂の中に手を突っ込みました。指先が子どもの指先とふっと触って、その子は私の指先をちょっと触ることが嬉しくて、そうやっている間にその子はとても穏やかになってにこっと笑いました。私はそのときにその子の手の指先を、いとおしく思いました。この指先にこの子が、なんていうか社会の中で自分ができない、やれない、そして他人から変に思われているという、そういう思いになったときに、自分が悪いんだ、

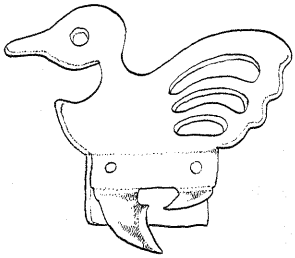
そんな思いになったとき、最初は自分で頭を殴ってたんだけれど、それから次には手を人の目から見えないようにして、いわば恥ずかしい自分を土の中にうずめてしまったような、私はそんなふうに思ったんです。それでその子と一緒に私も手を入れたときに、その子はその思いを分かってもらったっていう気がしたのじゃないかしら。それはそのとき一回だけじゃなくて何回もそういうときがあったんです。

F　その子の中にある悲しさと上向きに生きようとするものが、伝わってきますね。

M　そういう公園の中で、お母さんたちが話しているときにその子は、自分の頭をたたくだけじゃなくってね、キーッとか、大きな声を張り上げる。

F　もうやめてくれっていう叫びなのでしょうね。

M　そうするととたんに周りの大人たちは、またキッと振り向いて、この声はなんだというような、そういう雰囲気になるんですね。そうするとそのそばにいる私もなんか周りから一緒になって変に見られているような気になって、もう本当に居心地が悪くなっちゃう。早く学校につれて帰りたいっていうような気にもなる。



でもその子は学校には帰らないでその手をうずめる、そして僕と一緒に気持ちの上のやり取りをしているっていうところでね、そこにとどまっていたんですね。それから何回か、いろんな公園に行ったときにもそういうことがあって、そのたんびに僕はいたたまれない思いになりながら小さくなってね、「ああ、この子は今日はこんなに叫びませんように」とか、そんなことを心の中で願いながら、行ったときもある。だけどいま考えると、僕がそんな思いを持って一緒に行くときはやっぱりその子はそんなに楽しくなかったでしょうね。こっちも腹が据

わってね、その子と居心地がよく、過ごしたことが何度も何度も、それは楽しい思い出でもあります。

F　そうやって手をうずめてることは、自分自身を消すことと言っていいのかしら。

M　そう言っていいんだと思うの、それは。

F　そうするとガンガン自分を殴ったりすることも、よく自傷行為なんていうけれども……ああいうことも自分の存在を否定してるような気持ちなのでしょうか。

M　もうそれはね、こうやってつきあっていって明らかですね。そうやって手をうずめて遊んでいるときには、自分の手で顔をたたくことはやらないのです。それは僕は決してこうだからこうするとか、こうだからこうならないなんていうように、因果関係の考え方は取らないようにいつも思っているけれども、この場合、同時にそこで起こっていることだから。自分を消したいということを手で表現していると、自分の顔を自分の手でたたく、殴るというようなそういうことをしないで、むしろそれを人との間のお互いの分かり合い、慰め合いというような、一緒に過ごすということになってくるのだと私は思っています。

F　じゃあ、表現を育てることは、表現を受け取ることから始まるのかしら。その子の小さな表現をも受け取って、そしてそれを肯定する。

M　それはその通りでね、その子がそうやってね、自分の苦しみなり悲しみなり悩みなりを表現してるんだから、それがその子のそのときの生き方なんだから、受け取るよりほかない。一緒にいる仕方っていうのは他にないんじゃないかと私は思う。

F　そうですね。

M　それがその子のそのときの生き方なんだからね。その子の生き方を受け取って、そして一緒にそれを共感するって言ってしまうとなんだか平ったくなる気がするけれど、あるときは一緒に悲しくなったり、一緒に怒ってみたりね。それから一緒にこう土の中にもぐりたいよう

な恥ずかしい気持ちになってみたり、そういうのが保育っていうことじゃないかということを、こういう子どもとの付き合いからね、とっても学びました。

F　じゃあ今日はこのくらいにしましょうか。

M　それでね、このことは決してね、障碍を持ってる子どもだけのことじゃないってことを付け加えておきたいと思います。私は長いことお茶の水女子大学の附属幼稚園に通っていたときにも、子どもが手をうずめるということに何度も出会いました。ある場合にはもっとはっきりとそれが見られるときがあって、先生から叱られたときに、それも大して叱られたっていうわけじゃないんだけれどその子にとっては叱られたと響いたとき、その子は自分が遊んでいたシャベルを土の中にうずめた。それで僕が「あれ、ここに何があるんだ？」と言うとその子はうずめたシャベルを手でたたいて「ほら、あった」と言ってシャベルを出してくる。で、またうずめて、で、またたたいて「ほら、あった」。先生から叱られた後の後ろめたい自分をうずめてるんだ、ということに何度も向き合って、そうするうちに遊びをすることによってその子はその後ろめたさから解放されて、その子は更に先に進んでいくことができたんだということを何度も経験しました。障碍をもつ子どもたちの場合にはそんなに簡単にその気持ちが解消したとはならなくて、それがかなりとどまっていて、それをとどめながら今度は、保育者である自分自身が、どうやって立ち上がって本当に上向きになってその先を一緒にやっていくかっていうところにまで自分をこなしていくかってことがね、これが障碍をもつ子どもの保育の、非常にありがたい点でもあり、また非常に難しい点でもありね、また人に対して説明のしにくいところでもありますね。保育の中で学ぶこと、非常に大きなことですね。

F　分かりました。